

安土城天主台周辺の発掘調査

～昭和から令和の発掘調査で見えてきたこと～

2024.6.2 第18回 鎌刃城まつり

滋賀県文化スポーツ部文化財保護課 岩橋隆浩

1. はじめに 一本日の構成とねらい

◎安土城の天主台と本丸取付台の概要を知る

◎天主台とその周辺での調査の歴史を知る

昭和の事業

平成の事業

◎令和5年度の発掘調査成果を見る

◎今後に残された課題を知る

2. 安土城の天主台と本丸取付台～その概要～

◎その位置

安土城の位置と立地の特徴（図1）

城内での位置（図2）

もっとも標高の高い位置にある天主台

その直下にある本丸取付台

これらは主郭部の中にある

主郭部⇒黒金門より中の安土城の中核部

今回の調査地は主郭中心部にあたる

◎その歴史

築城から完成そして・・・

天正4年(1576) 築城開始

天正7年(1579) 天主完成

天正10年(1582) 本能寺の変

本能寺の変後の安土城炎上

安土城はすべて灰燼に帰したのか？⇒主郭部のみが焼失した
廃城

天正13年(1585) 八幡山城の築城による

それから355年後

昭和15年・16年に天主台と本丸で発掘調査

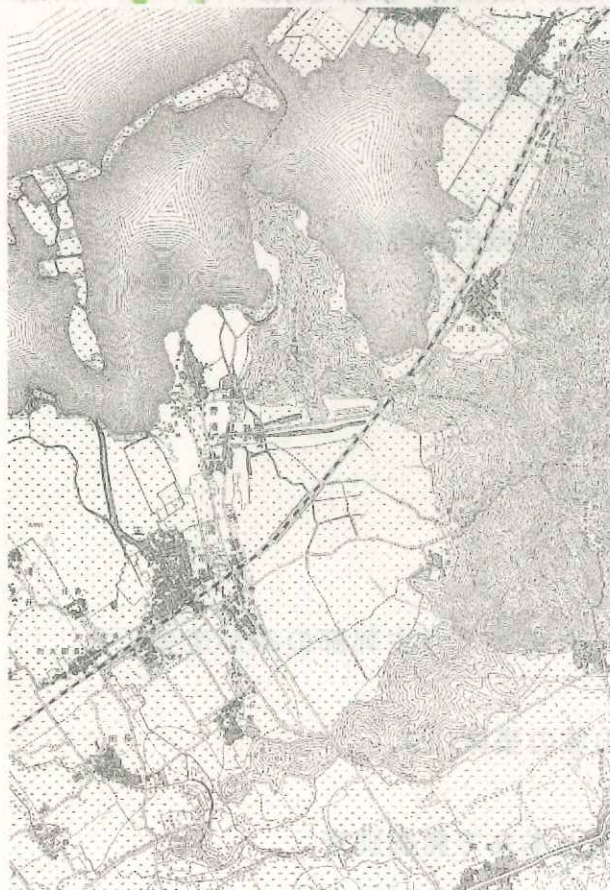
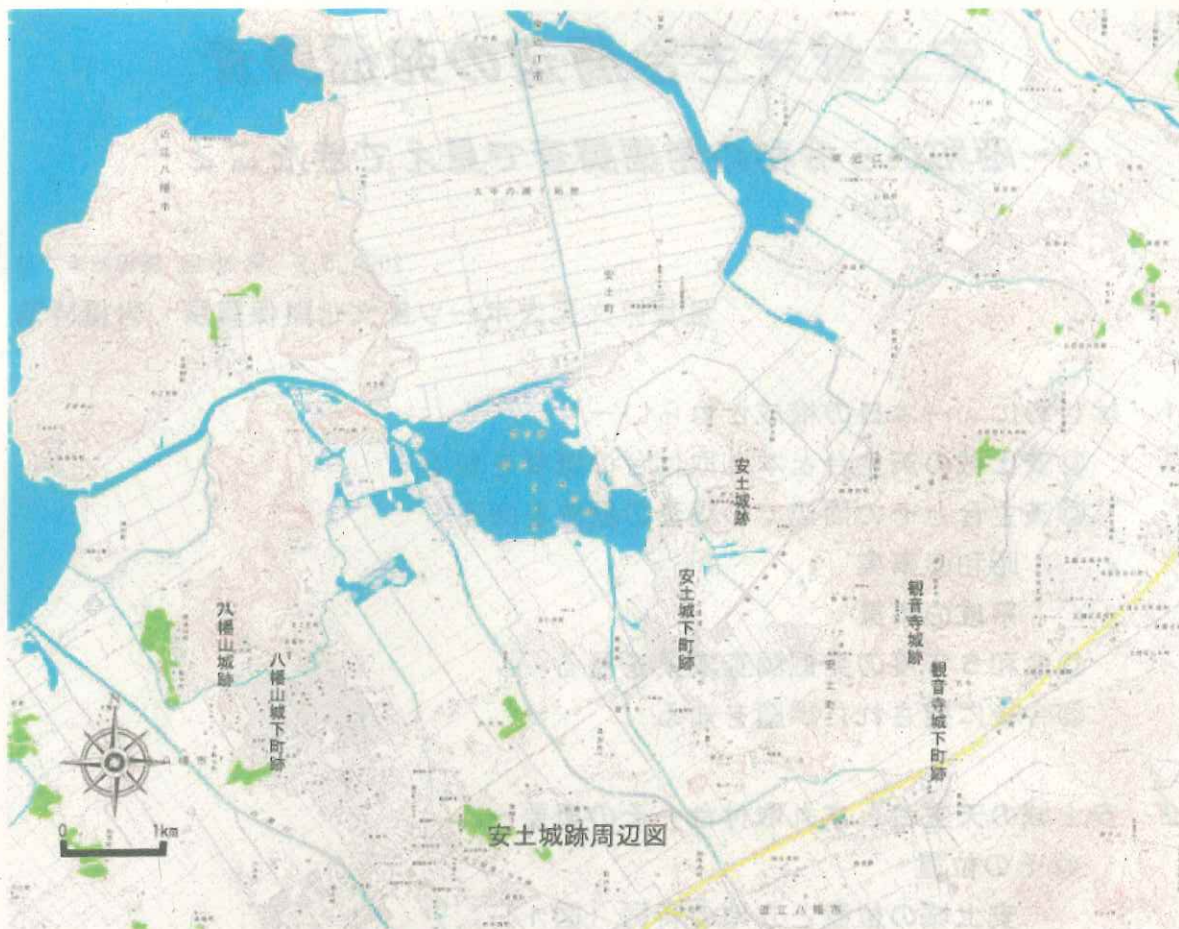


図1 安土城跡の位置
上：現在の地形図
下：明治26年の地形図

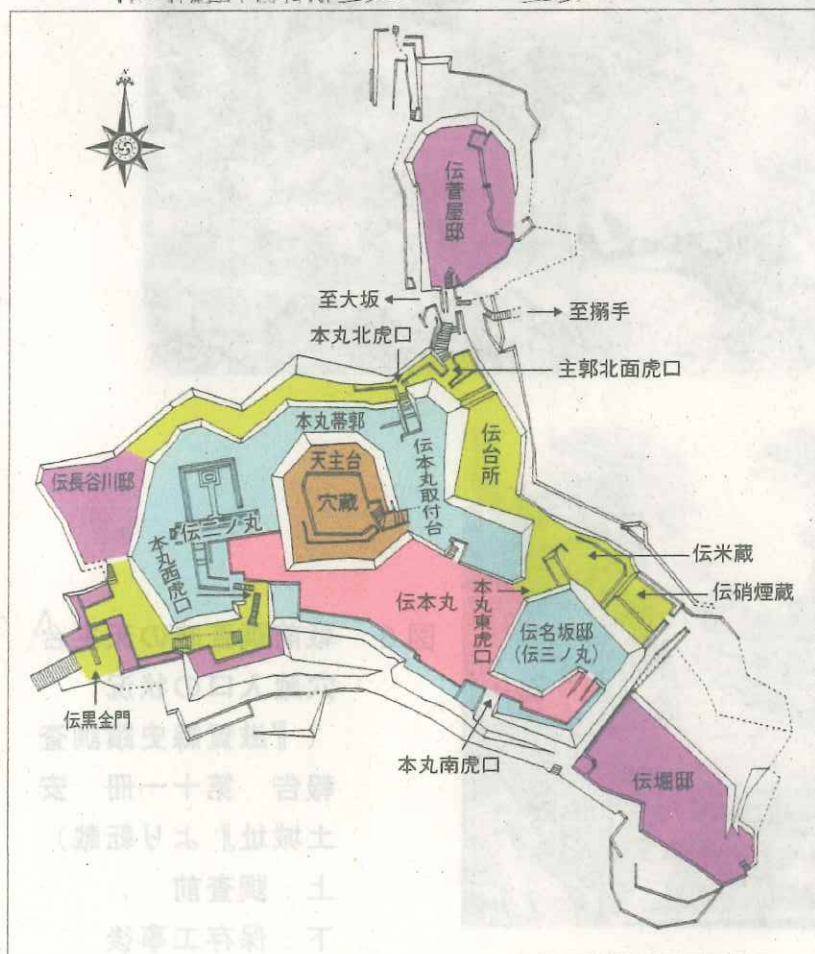


図2 安土城跡平面図
上: 安土城南半部
下: 主郭部の空間構成
(『発掘調査 20 年の記録 安土 信長の城と城下町』より転載)

3. 天主台付近における昭和の事業

◎昭和 15・16 年度の事業（図 3）

・ 史跡の保存工事に伴う発掘調査

天主台と本丸の発掘調査

当時の天主台と本丸の様子

「一面瓦礫の山」

「何がどこにあるのか一見してわからない状態」

瓦礫や土砂を除去して建物礎石や天主台を検出⇒報告書より



現在我々が見ることの出来る状態になった



(遷葬地跡の東側) 天主台入口 (一)



(後世の調査結果) 天主台入口 (二)

図 3 戦前調査時の天主台
穴蔵入口の状況

（『滋賀縣史蹟調査
報告 第十一冊 安
土城址』より転載）

上：調査前

下：保存工事後

◎昭和の環境整備事業

主郭部の環境整備工事

昭和 35 年度から昭和 50 年度まで

主に石垣の修理工事が行われた

⇒ごく一部しか報告書が刊行されていない

片内に残されている公文書でしか内容がわからない

⇒どの石垣がどのように修理されたのか内容が不明確

天主台付近では・・・

本丸取付台を構成する石垣は修理されている

天主台の石垣は現状のままで修理されていない

天主台南面の石垣裾部はこの時の修理で検出された

4. 天主台付近における平成の事業

◎城内主要遺構確認調査（図 4）

主郭部における遺構確認調査

平成 7 年度から平成 12 年度まで実施

平成 7 年度：主郭南面

平成 8 年度：主郭東面

平成 9 年度：主郭北面

平成 10 年度：主郭西面

平成 11～12 年度：主郭中心部

このうち天主台付近では平成 10～12 年度に確認調査を実施

※「確認調査」とは？

◎主郭西面での確認調査（図 4）

天主台西石垣の裾部（二の丸東溜）

当該箇所の遺構の有無を確認するための調査

火災により損壊した建物跡を検出

壁・建築部材が現位置を保って出土

天主台石垣北西隅角部

天主台石垣の平面形状と残存状況を確認するための調査

高さ約 3～4 m（築石 6～7 石分）が残存している状況を確認

◎主郭中心部での確認調査（図 4）

天主台北北西隅角部

天主台石垣の平面形状と残存状況を確認するための調査

高さ 3～4 m（築石 7 石分）が残存している状況を確認

石垣裾部には通路の路面が残存していることを確認

本丸取付台

一部の建物礎石が地表に見えている状況

建物遺構の残存状況を確認するための調査

建物礎石列の一部を確認

⇒建物の規模などを考える手がかりが得られた

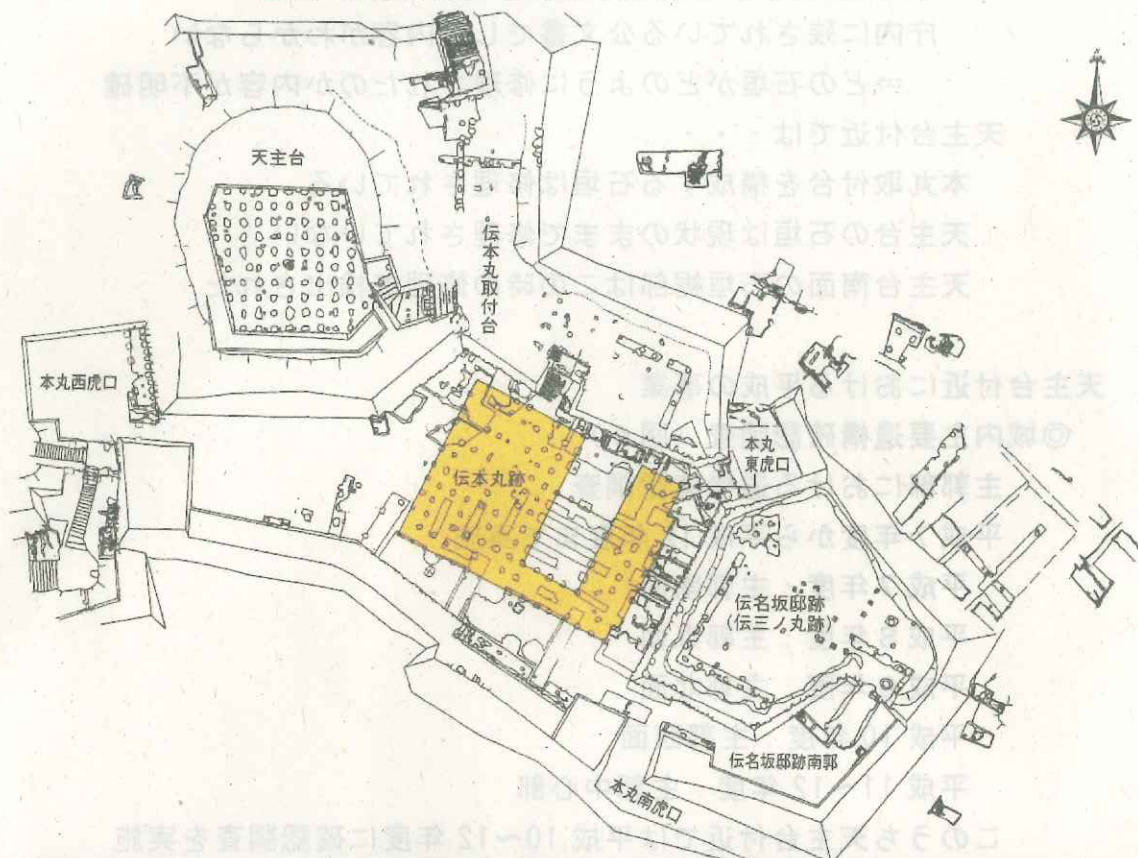


図4 天主台付近の平成の調査 上:発掘調査箇所 下右:二の丸東溜(『図説・安土城を掘る』より) 下左:天主台北北西隅(『発掘調査報告12』より)

5. 令和5年度の発掘調査

I. 今年度の事業の概要

発掘調査の目的

滋賀県では、令和4年度に『特別史跡安土城跡整備基本計画』を策定し、天主台周辺地区、主郭部周辺地区、大手道周辺地区、旧惣見寺・百々橋道地区などにおいて、20年計画で環境整備等の事業を実施することとした。

令和5年度は、天主台周辺地区の環境整備に関わる資料を得ることを目的として、天主台東面および本丸取付台北半部において発掘調査を実施している。

調査期間 令和5年10月～令和6年3月中旬(予定)

調査箇所 特別史跡安土城跡天主台周辺地区
～天主台東面・本丸取付台(近江八幡市安土町下豊浦)

調査面積 315㎡

II. 発掘調査地の概要

調査箇所(図2 図5-1 図5-2)

安土城の最高所にある天主台の東面

そのすぐ下の曲輪である本丸取付台

主郭部の最も中心⇒主郭中心部

調査前の状況

天主台東面・本丸取付台ともに樹木が繁茂した状態

本丸取付台では建物礎石と思われる石材の一部、天主台東面では天主台石垣の築石の一部が、地表面に露出していた。

当該地の調査履歴

先にふれたとおり

III. 発掘調査の成果

(1) 天主台東面

①基本層序(図5-4)

最上層の腐植土層(第1層: 缶・バランなどの現代の遺物とともに瓦片や焼け固まった壁土片を含む)の下に、拳大から人頭大を中心とした礫層(第3層)が広く堆積している。

また、後述する天主台石垣築石の背面では、第1層の下に天主台石垣の裏込層に黄褐色粘土層の混じった土層(第6層)が堆積している。

②検出した遺構(図5-3)

●天主台石垣に関わる遺構

天主台石垣の築石と石垣の崩落土層を検出した。

天主台石垣の上部はその前面に崩落しており、崩落した石垣裏込層と築石が広く斜面をなして堆積している状況。確認できた築石は高さ1石から3石分。また、調査区北端で、鈍角の鑄になっている算木積みの隅角部を検出した。

築石背面では、天主台の現存する天端に堆積している黄褐色系の土層に栗石が混じった層（第6層）の上面を検出しているが、この層は天主台石垣が崩落した後に堆積した土層と考えられる。

崩落土層は、上面を検出したのみだが、ここからは遺物が出土していないため、堆積した時期は現時点では不明。しかし、崩落土層の裾部では、本丸取付台の建物に伴う瓦や壁土の上に崩落土層が堆積しているようなので、天正10年の主郭部焼亡からそう遠くない時期に堆積したと考えられる。

（2）本丸取付台

①基本層序（図5-4）

最上層の腐植土層（第1層）の下に、軟質の暗灰褐色もしくは暗黄褐色混砂土層（第2層）。基本的にその下に硬質の黄茶色混砂土もしくは黄灰白色土層（第5層）があり、この層が天正期の遺構面となる。

部分的に第5層の上に（特に天主台石垣崩落土層裾部に近い個所）硬質で焼土や瓦の細片を含む灰白色もしくは灰黄色混砂土層（第4層）が堆積している。

②検出した遺構（図5-3 図5-5）

●石垣修理に関する遺構

本丸取付台では、一部を除いてその周囲にある石垣の積み直し、昭和40年代に行われており、腐植土を除去した段階で、この修理に伴うと考えられる遺構を検出した。

S0はこの修理に伴う石垣裏込層、S1・2は土坑で埋土に番線やボルト付きの金物などが含まれることから、この修理に伴って掘られた穴であると考えられる。裏込層（S0）は、施工年度によって天端の高さが違い、北端の昭和48年度に施工された部分では現天端石の裏側に全く裏込石が入れられていない。

また、礎石を検出した遺構面の高さと比べて、石垣天端石の上面高が低いことから、全体的に天端石が一石分足りないようである。残されている写真を見ると、この部分の遺構面については、昭和40年代の修理以前にすでに欠失していたものと推察される。

●建物跡とそれに付随する遺構

基本層序で述べた第5層上面で、建物の礎石列と礎石抜き取り跡、

建物に付随すると考えられる遺構を検出した。

《建物跡》

建物跡の礎石列は、北側柱列と西側柱列と考えられる列を検出しました。礎石は本丸などと同等の大型のものをを用いています。被熱のため赤変しているものが多く、また表面の剥離や礎石自体が割れているものもあります。なお、礎石の一部（S 1 東側の礎石）には表面観察で柱の痕跡が明瞭に確認できます。

礎石列は、西側柱列は礎石が揃っていますが、北側柱列は礎石の有る部分と無い部分があり、無い部分には礎石抜き取り跡と考えられる土坑（平面図の網掛け部分）があります。また、北側柱列と考えた柱列からさらに北へ一間分飛び出した礎石を確認していることから、建物は北へ延びる可能性があります。

柱間は、建物北西隅の礎石を基準とすると、その東の礎石との間が8尺、以後5尺5寸（推定）の間隔で土坑が並び、南側には6尺5寸、3尺、7尺の間隔で礎石が並びます。8尺の柱間は、これまで城内で確認した建物の柱間（天主は7尺、本丸御殿は7尺2寸、伝羽柴秀吉邸跡上段部は6尺3寸、下段部は6尺5寸）の中では最大のものとなります。

建物の全体規模については不明で、次年度以降の調査を含めて検討する必要があります。

また建物の方位は、今のところ本丸取付台東端石垣（伝台所背面の高石垣）天端の方位に規制されているように見えます。また、天主台石垣裾部の方位との関係は今のところ詳細は不明です。この点は、全体規模と同様に、次年度以降の調査での所見も含めて検討する必要があると考えています。

《建物外周の遺構（石列など）》

礎石列の外側には遺構があります。西側柱列の外には石列があり、その外側の遺構面が一段低くなり瓦片などが堆積している状況を確認しました。

また北側柱列の外側には、瓦片や焼土粒を含む硬質の灰白色土層が見られることから、建物の外側が一段低くなっている状況、もしくは土塀の基礎構造を検出したと思われます。このことから、西側柱列の外側は天主台石垣裾部まで建物等がなく通路状の空間であった可能性が高くなりました。

《その他》

建物礎石には被熱した痕跡が見られることから、ここにあった建物は火災によって焼失したことは明らかなですが、その上には火災に起因する

遺物などの堆積が、ほぼ見られませんでした。第4層とした土層がその一部と考えられますが、かつて天主台西面の発掘調査で確認したような火災の生々しい痕跡はありません。このことから、本丸取付台一帯は、天正10年の主郭部一帯の火災から現在に至るまでのある時期に、火事場整理が行われたものと考えられます。

IV. 今年度の調査のまとめ

(1) 天主台東面の石垣倒壊の状況を確認しました。

石垣上部が倒壊し、下部の築石の前面に堆積している状況を確認しました。天正10年6月、本能寺の変の後、安土城天主が焼失・倒壊した時に降に崩れたものと考えられますが、残存する築石の高さがほぼ揃っていることから、自然倒壊したものではなく、人為的に崩された、「破城」が行われた可能性も考えられます。安土城は、天正13年の八幡山城（滋賀県近江八幡市）の築城に伴って廃城となることから、この時に破城が行われた可能性が考えられます。

※破城～城の機能が失われたことを視覚的に示すために、意図的に城を破壊すること。門や石垣の隅角部など、目立つところを破壊することで、城が破壊されたことを象徴的に示す。

(2) 本丸取付台の建物礎石の残存状況を確認し、建物の規模などを検討するための資料を得ることができました。

直交する二方向の礎石および抜き取り跡を検出しました。平成の調査で確認した礎石とあわせて、本丸取付台に建物が存在したことが確認できました。しかし、建物の規模や構造、役割の解明にはさらなる調査が必要です。

礎石からは柱の痕跡など火災の痕跡が見られ、安土城炎上の様子を物語っています。また、伝二の丸東溜まりで検出された焼け瓦の堆積のような被熱した遺物の堆積が見られないことから火事場整理が行われたと考えられます。その時期については不明ですが、天主焼失から天正13年の廃城までの信長の後継者が安土城に入城した時期、江戸時代の惣見寺による安土山の清掃管理、昭和40年代の石垣修理に伴うもの、などのいくつかの可能性が考えられます。

(3) 本丸取付台で行われた昭和40年代の石垣修理の実施状況を確認しました。

これまで、公文書でしか確認できなかった昭和40年代の石垣修理の実施状況を現地の遺構で確認することができました。本丸取付台の外周については、石垣や裏込め石も含めて築城時の遺構が失われており、修理に際して裏込めも含めて石垣を積み足したものと考えられます。

(4) 今回の調査では、信長時代の安土城だけでなく、本能寺の変から現代にいたるまでの安土城の歴史を物語る遺構が検出されました。これまでは文字資料のうえで確認されていたことですが、安土城の歴史が、本能寺の変の段階で止まるのではなく、現代まで長く続いていることが、現場の遺構として明らかになりました。



図5-1 発掘調査対象地位置図



図5-2 発掘調査実施箇所



本丸取付台建物1（西から）



本丸取付台建物1（北西から）



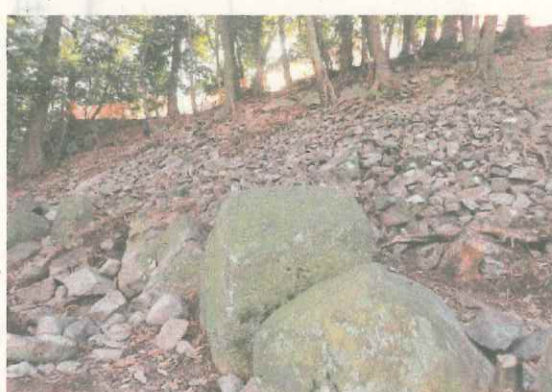
本丸取付台建物1と石列（北西から）



本丸取付台建物1の礎石焼損状況（西から）



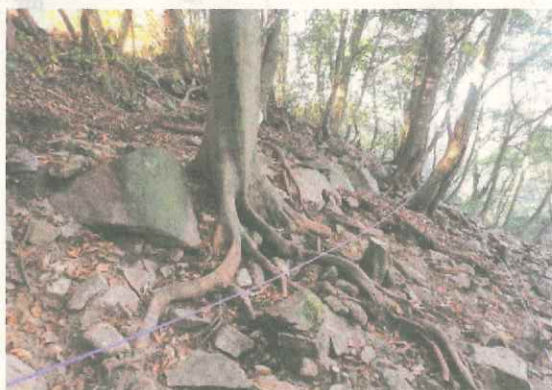
天主台東面の崩落状況（東から）



天主台東面の崩落状況（北東から）



天主台石垣北東隅角部（東から）



天主台東面石垣築石残存状況（南東から）